目録システム講習会の新CAT 導入後の在り方：目録入力要員養成を意識して

（平成１０年度第１回総合目録データベース実務研修レポート）

兵庫教育大学附属図書館目録情報係
家住　久子

１．はじめに

この４月から大学も変わり、目録情報係で目録業務に携わるようになった。今まで管理やサービスという担当のせいもあり、NACSIS-CAT は入力するのではなく、常に利用する立場であった。乱暴な言い方かもしれないが、サービス側から思うのにはとにかく何らかの方法で相当する書誌がヒットすれば O.K.で、その結果利用者にその書誌・所蔵の情報を提供でき、複写や貸借にたどり着けば良かった。ところが、いざ入力となると、書誌データの記述文法はどうだったのか、特にヨミの表記や分かち書き規則、データ要素間の区切り記号の使用方法、また図書書誌レコードの作成単位についてはどうだったのかなど戸惑うこともあった。その度に、各種マニュアルや講習会テキストを読み直したり、他のデータをチェックしたりと、時間を費やしてしまった。どういう状況であれ、一定の品質を保たなければならない NACSIS-CAT であるものの、現実はいきなり目録入力の一線に立つことがあるということである。

現在は参加機関の増加（1998.3 月末現在 721 機関）や遡及入力の促進などにより NACSIS-CAT もデータ量（1998.10.2.現在／図書書誌 385 万件・図書所蔵 3,494 万件）としても充実してきている。目録作業も書誌の検索、識別・同定、所蔵データの登録、ローカルデータベースへの取り込みと一連の流れの部分がかなりの割合を占めてきている。NACSIS-CAT の登録書誌データを利用する限り、書誌の識別・同定については慎重にならなければならないものの、以前のように目録規則や目録基準に精通していなくてもある程度こなしていけるのが現実である。しかし、実際 7.3%ぐらい（9/21～10/25：10 日間平均新規図書登録は 1824 件）は NACSIS-CAT でヒットしない書誌である。流用入力、オリジナル入力にかかわらず、何らかの形で新規書誌を作成する作業は現在もあり、今後も決してなくならないはずである。

昔は目録自体経験豊富な専門職のカタロガーと呼ばれる人達によってとられていたのだと思う。実際 NACSISI-CAT をよく見てみるとレコードの質も様々で、現実に各参加機関ではいろんなレベルの人によって目録入力がなされていると感じた。（目録経験の豊富な図書館員、新任目録担当図書館員、派遣社員、パート職員、アルバイト、外注など）NACSIS-CAT の意義は各参加機関のオンライン共同分担目録方式で入力の上に、その基礎データ（書誌情報など）を参加機関共通の財産にすることにある。その時に一定の品質が保たれた NACSIS-CAT であるためには各参加機関の目録入力にあたる個々の能力や意識によることになる。重複した書誌レコードが作成されるとデータベース自体の品質に関わると共に、NACSIS-ILL への影響も大きくなる。共同分担目録方式である以上、個々でデータベースの質の維持への努力はしなくてはならない。個人で年数・件数をこなし経

験を重ねてレベルを上げるとしても、目録入力経験がなく又は浅くても、一定のレベルまでに入力できる状態にするには現場での指導、マニュアルや講習会の担う役割は大きい。そして、その中でも特に全国的に統一された講習会は欠かせないはずである。新 CAT が開発され、各参加機関は平成１５年末までには全て新 CAT へ移行することになる。各クライアントで自由にインターフェース部分を設計できるということになると講習会の在り方が従来とは随分変わるだろう。安定した質の目録を維持していくためには NACSIS-CAT への入力要員養成にかかっており、新 CAT と共にその役割の大きい講習会について考えてみたい。

２．現行の講習会

平成 10 年度の目録システム講習会は下記の通りである。（平成 10 年度教育研修事業要綱参照）目録システム講習会は地域講習会を含めると全国で 36 回開催され、675 名もの人が新たに講習会を受けることになる。（現在、既受講者は再度受講できない。）

平成10年度目録システム講習会（平成10年度教育研修事業要綱参照）

	開催回数		定員合計
目録システム講習会図書コース	6	各回34名	204
目録システム講習会雑誌コース	4	各回34名	136
目録システム地域講習会図書コース	17	各地約10名	224
目録システム地域講習会雑誌コース	9	各地約10名	111
総 合 計	36		675

上記の中で図書コースの受講者及び講師・講師補助者のアンケート（1998.9.11 までの受講者 293 名）をチェックしてみた。下表は受講者のアンケートのまとめで、詳細は次の通りである。

目録システム講習会（図書）アンケート（98.5.20～9.11）

（１）開催方法について				
	適当	長い	短い	回答なし
１）期間	88.1%	2.7%	5.5%	3.7%
	適当	速い	遅い	回答なし
２）進め方	85.7%	9.9%	2.4%	2.0%
	適当	早い	遅い	回答なし
３）時期	84.6%	2.7%	5.8%	6.9%
（２）講義について				
	適当	難しい	易しい	回答なし
１）レベル	88.1%	5.8%	3.4%	2.7%
	分かりやすい	分かりにくい		回答なし
２）内容	87.7%	6.8%		5.5%
	適当	不適当		回答なし
３）時間配分	85.7%	4.8%		9.6%
（３）実習について				
	適当	難しい	易しい	回答なし
１）レベル	84.6%	9.6%	2.7%	3.1%
	分かりやすい	分かりにくい		回答なし
２）内容	75.1%	11.9%		13.0%
	適当	不適当		回答なし
３）時間配分	85.7%	12.3%		2.0%
（４）テキストについて				
	分かりやすい	分かりにくい		回答なし
	87.7%	8.9%		3.4%

Ⅰ．受講者アンケート

（１）開催方法について

機関、進め方、時期のいずれも受講者の 84.6～88.1%が「適当」だということで、ほぼ問題はない。ただし、進め方で「速い」という回答は 9.9%と思ったより高い率である。具体的には「経験が少ないため実習が進むにつれついていけない」「2､3 日め（特に書誌階層のある書誌や出版物理単位のある書誌の修正や登録）が速い」「目録修正・登録の実習時間を長くしてほしい」とあった。

（２）講義について

レベルや時間配分が「適当」、内容が「分かりやすい」と回答された受講者は 85.7%～88.1%とほぼ問題ない。レベルが「難しい」や内容が「分かりにくい」の回答の主なものは「流用入力」「新規登録」「書誌階層のある書誌・出版物理単位のある書誌」「書誌修正」「典拠レコード」「登録総論」などであった。ただし、内容が「分かりやすい」と回答の中には「～について講義してほしい」との希望があり、上記同様の内容の他に「コーディングマニュアルの使用方法」「雑誌」などもあった。時間配分の「不適当」について、「限られた 3 日間なので実習時間を長くする意味で講義はもう少し短くても」という反面、「登録の講義時間が少ない」という回答もあった。

（３）実習について

レベルや時間配分が「適当」と答えた受講者は 84.6～85.7%であるが、内容が「分かりやすい」は 75.11%と講義よりも少ない。（２）の講義よりもレベルが「難しい」、内容が「分からない」、時間配分が「不適当」だと回答した受講者が多い。主なものはレベルについては「洋書」というのがある。洋書は経験がなく和書は慣れているということがあるかもしれない。初心者で時間的に足りなくて「難しい」と感じた人もいた。内容については「流用入力」「新規登録」「書誌階層のある書誌・出版物理単位のある書誌」「洋書登録（和洋の違い）」「目録規則」「記述文法」などが多く、他に「リンクレコード新規登録」「参照ファイルと NC ファイルの違い」「課題集（具体的には課題 18）」などがあった。講義同様に「分かりやすい」とした回答した中には、「～について重点的にしてほしい」と希望があり、内容的には上記同様であるが、他に「並列書名」「視聴覚資料」「所蔵追加・修正」などもあった。時間配分での「不適当」はほとんどの人が「実習時間を長くしてほしい」であり、付け加えて「課題実習後の解説がほしい」という回答もあった。

（４）テキストについて

回答の多くは「分かりやすい」が 87.7%ではあるが、その反面「分かりにくい」が 8.9%と以外に多い。中でも「記述文法」「コマンド（短縮形も含む）の流れ」で、他に「レコード修正・削除」「課題集の解答解説・索引」があがっている。「～について記載してほしい」では「初心者の誤りやすい例や対処方法」「COPY の流用登録例」「洋書検索・登録例（補講だけでなく）」「課題件数を増やしてほしい」などもあがっていた。

（５）その他、講習会についての意見・感想・要望について

内容は多義に渡っており、（１）～（４）に共通のものも多かった。（１）～（４）以外で比較的多く、気になった内容の主なものは次の通りである。「地域講習会の回数・人数を増やしてほしい」「レベルわけをした講習会を望む」「実務経験者と初心者に分けてほしい」「疑問や問題が出た際に再度受講したい」「小規模で聞く人がいないので、中級実務

者の講習会を希望する」「図書館用語が理解できなかった」「データの項目名やコマンド（略称も含む）の意味が分からない」「目録規則・基準の必要性を改めて実感した」「目録規則・基準について確認したかった」「ビデオの説明が分かりやすい」「大学図書館間の協力（ネットワーク）を感じた」「マニュアルだけでは気づかなかった所に目が向くようになった」「講義では理解したと思ったが、実習では時間がかかった」「目録規則や記述文法がわからないので、業務に戻ったら不安が残る」「身近に講師がいて分からない事を質問でき良かった」「目録システムを系統的に学習できた」

Ⅱ．講師・講師補助者のアンケート

（１）日程・カリキュラムについて

多くの方が適当だと思われていた。しかし、経験度によって２～3 日めの内容が大変だという意見もある。特に第 7･8 講の書誌階層と出版物理単位の書誌登録では、説明必要項目、実習課題が多すぎるということで、後 1 日増やしてはという提案もあった。日常実務でよくある典拠レコードの新規登録実習や補講４の書誌調整の指針（レコード品質という意味からも）でのもっと詳しい説明が必要であるという意見もあった。

（２）テキスト等教材について

多くの方がテキストは分かりやすくコンパクトにまとめられており、ビデオは理解しやすく効率が良いという感想であった。テキストに重複書誌防止ためにも最近の誤書誌作成の事例・要因の具体例も盛りこんでみてはとか、課題集に内容的にわけて基礎編と応用編と目次付けをしてみてはとかの提案もあった。また、自館に戻った際にでもできるので課題はもう少し多くてもよいという意見もあった。教育用データはできるだけ現実にあった新しいものを希望されていた。

（３）受講者について

ある程度知識や経験のある受講者が今年は多かったようで、昨年よりスムーズに行えたという感想が多かった。ただし、端末操作に時間がかかり本来の実習に専念できなかったとか、受講者レベルに開きがあるので十分指導できなかったという感想がなかったわけではない。

（４）その他感想

目録情報の基準やコーディングマニュアルの解説中心の講習会もあってよいのではという意見もあった。新 CAT 移行後は講習会がどうなるのかと思われているようだ。技術的に受講する必要のない人が終了証書を得るために受講するケースがあるようだというのもあった。

受講対象者として、『受講時には目録システムの利用環境が整っていることを条件とする』となっているが、実際は導入前（接続前）の所もイメージを掴むために受講されているようだ。（アンケート：「未接続で経験なし」「４月接続で業務経験なし」）また、『目録システムに接続している機関で、図書または雑誌目録業務を担当している職員。目録規則等を理解していることを前提とする』となっているが、実際には検索だけ利用のサービス関係業務の方も多かったようである。『目録システムの運用に関する知識・技術の習得』にあるにもかかわらず、自分の大学の端末と違うと端末操作に時間がかかり、本来の知識・

技術の習得に集中できなかったりもする。（アンケート：「キーボード操作不慣れなため、後半からついていけなかった」）その上、目録規則や目録情報の基準の理解も様々であるゆえ、講師側も受講者側も負担度が大きいに違いない。

テキストの構成や内容を若干見直し、レベルをもう少しわけてもらえたらと考える。アンケートでは「接続前で目録経験なし」の人もいれば、「目録経験（NACSIS-CAT）５年」という方もいて一緒にというのはかなり無理があるように思う。確かに、学術情報センター及び地域講習会共催機関の負担は大きいだろうが、再度受講希望の方も多く、一度受講したら受講できないというのではなく、レベルに応じた講習会であれば、もっと実践に役立つと考えられる。また、日常、疑問に思っている点について質疑応答などできる機会があればさらに深まって良いのではないだろうか。今後の講習会については４．で後述する。

３．新ＣＡＴ

将来的に接続端末の増加と共に現行システムで対応できないことや多言語資料への対応などから新 CAT が開発された。通信手順には CATP というプロトコルを採用し、NACSIS から図書館への転送は今までのような統一した仮装画面ではなく、レコード（群）であり、クライアントにおけるユーザインターフェースは規定していないというものである。それにより図書館はクライアント側で設計が可能になり今までより自由度が高まる。

（１）具体的にどんな特徴があるか？

①検索対象とする参照ファイル

②従来のようなコマンドを使わないで操作ができる

③画面のレイアウトを自由に設定できる

例１：VOL フィールドを切り離して表示する

例２：簡略表示と詳細表示を一つの画面で行う

例３：書誌と所蔵、あるいは親書誌と子書誌を同時に表示する

④検索のキーとしてのフルタイトルキーができる

⑤各大学のシステムと一体化したシステム設計が可能

例１：図書館側のデータをもとにした所蔵の一括更新

例２：OPAC の検索との連動

［以上、オンライン・システムニュースレター No.60 抜粋］

⑥インターネットの各種ツールの利用できる

例１：電子メールを新目録システムクライアントと連動させ、書誌調整を効率的に行うシステム

例２：マニュアルや規則類、分類表や件名表を WWW に載せ、これらを参照しながら目録を作成

［『新目録所在情報サービス全国説明会』配布資料の 2.4.4 抜粋］

目録入力という側に立っていえば、①については自分の業務内容にあうように参照ファイルが設定でき効率がよい。②についてはコマンドを覚える（入力する）必要がなく、現

行 CAT より初心者でもボタン操作だけで簡単である。③についてはさらに馴染みやすくなるだろう。項目名が GMD、PTBL などというのではなく日本語で分かる名前になれば理解しやすい。コードフィールドにおいてポップアップメニューでコード選択ができたり、記述フィールドで記述例などが参照できればさらに便利である。極端に言えば、各フィールドにわかれていれば登録ボタン一つで、記述文法を熟知しなくてもデータ作成が可能になる。例１はフィールドを切り離すことで V0l の多い書誌が見やすくなる。例２や例３は現行 CAT における画面展開の繰り返しが、同一画面で表示されればコマンド操作もいらず一覧性があり、効率がよい。④についてはフルタイトルキーで検索することによって、ノイズが減少し、書誌同定もしやすくなる。⑤については各大学のシステムと一体化することで、NACSIS-CAT の書誌画面を意識することなく入力作業ができ、目録の作業の効率が上がる。例１は、図書館側のデータをアップロードできれば学術雑誌総合目録・遡及入力などの時に便利である。例２は OPAC 検索後、学内になければ、NACSIS-CAT にそのまま検索にいけて、スムーズである。（シームレス検索）⑥について例 1 は煩雑なレコード調整が、電子メールとの連動で同一の端末で処理可能となり軽減できる。例２では、端末の回りに各種マニュアル類を広げずに、同じパソコンで切り替えてマニュアルにあたれるのでスムーズである。検索機能や豊富な事例があればさらに便利である。

（２）問題点

前項で良い点ばかりあげてきたが、果たして良い点ばかりなのだろうか。下記の点で不安は残る。

①ローカル側の自由度が増す分、ローカルシステムの開発の負担が大きくなる。

②目録はボタン操作だけで簡単という考え方が浸透して、目録規則・基準が見落とされないだろうか。

③レコード調整の際に項目名・フィールド名が異なっていれば混乱にならないか。（現在は現行 CAT も分かっている人が多いが、時間の経過と共に新 CAT のクライアントのみしか知らない人が増加してきた時にうまく他館とコミュニケーションがとれるのか。）

⑤現行 CAT に慣れ親しんだ人にとって抵抗はないものなのか。

⑥共通の端末操作であった講習会はどうなるのか（異なるクライアントによる講習会の進め方の検討。受講者・学術情報センター・地域講習会共催機関の負担度）

新 CAT 導入によって各参加組織おいてアイデア次第で多種多様なクライアントの作成が可能であり、問題はあるものの、より簡単で効率的で便利になるに違いない。前項の講習会のアンケートでの問題もある程度は解決すると思われる。

４．今後の講習会

上述したように新 CAT システムのサービス開始により講習会も大きく様変わりすることは間違いない。平成１５年末までは各参加機関が順次新 CAT へ移行となるが、現行 CAT システムの利用組織もあり、さらに移行過渡期は煩雑になるだろう。一番大きな問題は講習会において異なったクライアントにおける操作説明が可能なんだろうかということであ

る。２．で前述したように、受講者の中には端末の相違だけで画面構成や操作方法に戸惑う人もあり、操作実習は困難ではないか。

（１）クライアントはどうするか？

新 CAT システムにおいて考えられることは教育用共通クライアントかメーカー別クライアントかである。過渡期である以上、当面は下記の 3 通りである。

（Ⅰ）教育用（講習会用）共通クライアント講習会

（Ⅱ）メーカー別クライアント講習会

（Ⅲ）現行ＣＡＴにおける地域講習会

（Ⅰ）について講習会用として教育用共通クライアントを用意し、従来通り講習会テキストと共に共催機関に配布する。（学術情報センター開発のクライアントが教育用共通クライアントということになると思われる。）講師側はこのクライアントの端末操作を新たに覚えなければならないという負担はある。教育用共通クライアントにおいて全国的に統一した端末操作で行うことでデータの統一を図る。各受講者は自館に戻った時に端末操作については照合し直す必用がある。（各参加機関は理解のために教育用ビデオ（＊）を補助として使う。）

（Ⅱ）については学術情報センター、共催機関がそれぞれのクライアントで講習会を行う。テキストに関して、端末操作部分の作成は各共催機関の負担となる。各接続機関の受講者は同一メーカーのクライアントの講習会場で受講も可能となり、より実践的である。教育研修事業要綱には会場名とともにクライアント名も今後記載の必用がある。異なるクライアントの場合、（Ⅰ）同様に端末操作部分は自館に戻った際に照合し直す必用がある。（NACSIS-CAT の一連の流れは教育用ビデオ（＊）で確認する。）

（Ⅲ）はいずれなくなるとして、受講者側から考えると（Ⅱ）の同一メーカー別あるいは自館に似たクライアントで受講できるのが一番実践的だと思われる。（ただし、学術情報センターで調整していただかなければならない。）端末操作という点では違うものの、その中身のデータレコードという点や目録そのものの考え方・基準は何ら従来と変わらない。今後はやはり、（Ⅱ）ということになるだろう。（近頃はパソコンなどの普及もありパソコンに慣れ親しんでいる人も多く、操作など大きく問題ないようである。）アンケートにおいてもかなりの受講生や講師が理解しやすいと好評の教育用ビデオ（下記の＊を参照）を併用することで統一を図る。

＊教育用ビデオ

NACSIS-CAT の一連操作の流れを理解できるように教育用共通クライアントを使った教育用ビデオを全接続機関に配布してもらう。教育用ビデオは現行のビデオのように「NACSIS-CAT 概論」「基準編」「検索編」「登録編」を新 CAT 対応として準備していただく。NACSIS-CAT 入力に関わる人は各接続機関で必ず見てもらう。実務経験者等が適宜補足説明や質問に対応できればさらに良い。（現実は指導体制が整っていないところが多いかと思うが、異なったクライアントになれば一層、指導体制

は各機関で今後整えていく必要がある。学内研修の一環としてこのビデオを利用しても良い。）

（２）講習会内容について

クライアントが各館独自となる分なおのこと、受講生のレベルの差を埋めるために、講習会内容も目録システムの概論や目録情報の基準に重点をおいた講義に絞るというのも一案であると考える。２．で前述したアンケートを参考に目録規則・目録情報の基準に重点をおいて次の通り案を考えた。

（A）目録基本コース

［①目録システムの概論　②目録規則・目録情報の基準　③検索総論　④検索技法］

（B）目録登録コース

（a）基礎編

図書［①検索実習　②登録総論　③所蔵登録実習、所蔵修正・削除実習　④書誌登録（流用・新規）実習、書誌修正実習（修正指針含む）］

雑誌［①検索実習　②登録総論　③所蔵登録実習、所蔵修正・削除実習　④書誌登録（流用・新規）実習、書誌修正実習（修正指針含む）］

（b）応用編

図書［①を除いて（a）同様、質疑応答］

雑誌［①を除いて（a）同様、質疑応答］

（A）と（B）にわける。両コースは内容的にテキストを含めてほぼ従来の講習会に準じる。クライアントによって画面構成・操作方法が異なっているものの、NACSIS-CAT の概念やレコードそのものは現行 CAT と何ら変わらないということを強調したい。ただし、（A）（B）とわけたこともあり、時間の都合上、各受講者は受講前にそれぞれの館で各関連講の教育用ビデオ（＊）を見てきてもらうことを必須とする。それにより、異なったレベルの知識・経験を少しでも埋め、同じスタートラインで講習会を始めることができるのではと考える。共通のビデオを使うことで NACSIS-CAT の標準化を図る。また、アンケートであがっていたが、沢山の例にあたって練習したいということから、講習会時に使用するものとは別に件数を増やした検索・修正・登録課題集（模範解答・解説付き）や間違いやすい（誤書誌）事例集・重複書誌事例集なども発行していただきたい。自館にもどって、自学自習のツールとしたり、本番入力の参考にできればと考える。一度受講はしたものの、しばらく目録入力から遠ざかったいる人が希望すれば、再度受講できるようなシステムがよいと考える。（必用に応じて受講できることが大事である。）受講者において（A）は必須で、（A）受講後、（B）を受講可能とする。また、（b）については受講を必須とはしない。個々の詳細は次の通りである。

（A）については今まで以上に目録規則・目録情報の基準にポイントを置く。適宜目録規則や各種マニュアル（目録情報の基準、目録システム利用マニュアル、コーディングマニュアル、オンライン・システムニュースレター、WWW 上の Q&A など）も紹介の意味も含めて参照しながら進める。マニュアル類の使い方・見方が分かれば自館に戻った際に、各種マニュアル類が引きやすいもになると考えられる。分からない時に各種マニュアル類

を参照する習慣をつけたい。これらによって受講者のレベルを上げる。実際、目録規則・基準などは自学自習して熟読・熟知しなければならないとは思うが、初心者にとってあの膨大なマニュアルを一人であたるというのは限界がある。そういう意味からもコーディングマニュアルなどの WWW 版に検索機能があると良い。NACSIS-CAT のレコードの見方も行う。（基本的な和洋の書誌はもちろんのこと、書誌階層のある書誌・出版物理単位の書誌なども含む）共同分担入力である以上「あれば使う、なければ作る」という思想のもとに作成済みのレコードがあれば必ずヒットさせてこなければならなく、基本原則であることを強調する。このコースは検索までとし、接続予定前の機関も受講対象とし、また目録入力に携わっている人ばかりでなく、サービスで検索を必要とする人も受講できることとする。（期間：1～2 日間）

（B）についてはさらに基礎編と応用編にレベルをわける。それぞれ、従来どおり図書と雑誌にわける。（一緒にとも考えたが、図書と雑誌では異なった係や担当者という所が多いということを考慮した。従来とは違い、必要ならそれぞれ再度受講可能とする。）（A）同様に、各種マニュアルのどこに関連しているかということを付け加えたい。分からない時に何にあたればよいのか？またどこを見ればよいのか？を指導する。新 CAT の特徴として前項⑥のような機能があれば実習中に画面確認できる。（WWW 版の各種マニュアルは最新版をお願いしたい。特に Q&A は随時追加していただき、分からない時の参考にする。）自館に帰った際に、これらを自学自習の基礎としたい。

（a）基礎編では重複書誌作成を減少させるためにも再度①検索実習も確認の意味で行う。（初めに正しい書誌を作成することがレコード調整作業の軽減であると強調する。）③④において基本的なパターンを実習する。アンケートでも書誌階層のある書誌・出版物理単位のある書誌が分からなかったと答えた人も多いことから、所蔵および書誌共に初めはシンプルなものからある程度複雑な書誌階層のある書誌などを一通り実習する。④ではリンク形成の流用・新規登録も含めて実習する。参照ファイルと NC ファイルの違いを説明し、和洋のレコード記述を再度確認する。どのファイルにヒットしたかで修正個所のポイントとは押さえ、登録時のレコードの見方をチェックする。従来のようにコマンドや画面にとらわれた一連の流れとして操作を覚えるというより、自分は何をしようとしているのか、何をしたいのか、次は何をする必用があるのかということを常に頭において実習してもらう。書誌修正についてはレコード品質を保つという意味からも実習は行う。レコード調整も多いので修正指針およびレコード削除を詳しく説明する。アンケートの結果からも洋書の説明の要望も多かったので和書同様に含める。（期間：3～4 日間）

（b）応用編では基礎編より登録課題の書誌階層の複雑なものや多言語のもの、特殊な資料（マイクロ資料・視聴覚資料・電子的資料・地図・楽譜など）について（a）同様に扱い。また、前もって日常の疑問点などを具体的に持ち寄り、講習会で検討できたり、質疑応答ができればよいと考える。（期間：1～2 日間）

（3）講習会実施について

ここまで、受講者の立場で考えてきたが、講習会を細分化することで学術情報センターや地域講習会開催機関での負担度はさらに大きくなってしまう。２．の記述通り回数及び人数に限界であるなら、あとは工夫をしなければならない。現在、私立大学の接続数増加

にも原因はあるが、受講者が過半数以上（平成９年度／私立大学：53%、公立大学 6%）が私立大学で占めている。今後、私立・公立大学での地域講習会も増加できるのではないだろうか。（実際、今年度は公立大学１回、私立大学１回、私立大学図書館協会で 2 回開催され、88 名受講可能である。）また、（B）（b）は今後検討課題として、当面、（A）と（B）（a）の切り分けはされてもいいように思う。（A）については、講義中心ということもあり、比較的従来のように開催可能と考えられる。クライアントにより検索方法は異なることになるが、デモを使い検索のポイントとしては理解できるであろう。（もちろん、余裕があるなら、開催機関において検索実習を加えた方がより実践的で良い。）アンケートでも「講義では分かっているつもりでもいざ実習になると戸惑う」と言う感想も多かったこともあり、（B）（a）についてはやはり実習が必要と考えられるので、（Ⅱ）の型で受講することとする。煩雑ではあるが、全国的に偏らないようにコースと共に学術情報センターの方で調節せざるを得ないだろう。講習会の意義は受講することで目録入力のレベルを上げるということだけでなく、顔見知りになることで相互協力のきっかけになるということもある。開催館の負担はあると思うが、そういう意味からも講習会はぜひ残してほしいと願う。講習会参加により横とのつながりができることはレコード調整においても大きな意味を持つと考えられる。地域や同一クライアントの参加機関での相互協力も今以上に必要になるだろう。今後は、相互協力のもとに講習会が開催されて行くと感じる。

５．おわりに

今回のレポートは自分の未熟さから気づいた講習会への希望や、当館での新 CAT 導入を目前にして、講習会はどうなるのだろうかという疑問からスタートした。最終的には利用者に提供できる情報をもつ NACSIS-CAT であればよい思う。しかし、NACSIS-ILL 利用上からも質的には統一された良いものであってほしいのは前提条件である。新 CAT 導入を向かえ、内容を含め従来の講習会の在り方を見直し、新しい講習会を考えていく良い機会にきているといると思う。NACSIS-CAT における学術情報センターや地域講習会共催機関への負担は多いとはいえ、目録入力要員養成にとって、確かに講習会の担う役割は大きい。新 CAT の部分が具体的に見えない上に、自分自身の未熟さからも講習会をより具体的にできなかったのは残念であるが、新 CAT になってもは端末操作は大きく変わるものの、中身であるデータは同じであり、NACSIS-CAT の品質保持においても目録規則・目録情報の基準は今以上必要になると考えられる。ただ、新 CAT によって、工夫しだいで、迅速かつ正確に簡単に入力しやすいシステムは可能であるとも感じた。当館でもこの 12 月より新 CAT／新 ILL 導入となるが、実際の所 SE との詰めもじっくりできず、見切り発車になるかもしれない。しかし、今後各図書館で使いやすいシステムを考えていくことが定員削減を向かえ、目録入力作業の軽減であり、初心者でも一定の品質を保って入力できるための一つの方法であるということを認識して、導入まで少ない時間ではあるが検討したい。さらに、目録入力要員養成として講習会がいつも必要な時に開催されているわけでもなく、異なるクライアントである以上、今後、現場での指導やマニュアルの整備の必要性も痛感した。（目録経験が豊富でない者が異動などで目録ということになり、膨大なマニュアル全部を一度に熟読し熟知することが不可能な場合やアルバイトや外部派遣社

員による遡及入力の場合など、NACSIS の書誌を理解でき、流用・新規登録なども何とかできるようにざっと一読できるマニュアルがあればと考える。定員削減などで日常業務に追われてはいるものの、教育用ビデオなどで目録入力指導ができるような体制も考えていく必用がある。）

研修中、新しい情報に触れ、経験し、自分は何をしていけばよいのか、また、今後の講習会の在り方を考えられたことは私にとって大きな体験であった。講習会の役割と共に、マニュアルの整備、現場での指導の大切さも実感した。そして、NACSIS-CAT は学術情報センターと参加機関、あるいは参加機関同士の協力の上にあることも強く感じた。今後、充実した一定の質が保たれた NACSIS-CAT になるよう、そのデータベースを作成する一員として努力したい。さらには、よりよい講習会が開催されることを期待したい。末尾ながら、忙しい中、長期に渡るにもかかわらず、快くこの研修に出して下さった図書館の方々に、そしてこの研修をお世話下さりレポートを仕上げる上で助言を賜った学術情報センターの方々に心から深く感謝致します。